経 済 研 究

第17号 第2号

April 1966 *Vol. 17 No. 2*

セフの域内貿易価格

野 々 村 一 雄

この論文は，経済相互援助会議の発展史とその問題点にかんする研究の一部である。この論文では，セフ加盟の社会主義諸国の貿易価格にかんする若干の問題を取扱う。貿易価格の，その他の問題点は，別の論文で取扱われる予定である。

1. 域内貿易価格の現状

ソ連とセフ加盟諸国との貿易の場合，貿易価格は，どのようにして定められてきたか。ここでは，まず，各時期別に，その大要をしるそう。

1) 1946—50年。プライアーによると，この時期には協定調印時の「平均世界市場価格」"the average world market prices" が採用されたという[1)]。これは資本主義世界の市場価格である。

2) 1951—53年。プライアーはこの時期を「ストップ・プライスの時期」"the era of stop-prices" といっている[2)]。1950年から朝鮮戦争がはじまり，その結果世界的に物価が騰貴したので，その物価騰貴の影響を除去するためにストップ価格なるものが考えられたのであろう。このストップ価格(стоп-цены, stop-prices)という言葉は，ソヴェト文献にも出ている。たとえばイー・ズロービンは，1962年6月に発表された論文，「社会主義世界市場，その価格，通貨，決済制度」のなかで，つぎのように述べている。「1950年に，朝鮮戦争と関連して資本主義世界市場で価格の急激な上昇が起ったとき，社会主義諸国は，1949年末および1950年初頭の資本主義世界市場の『ストップ価格』を価格の基礎とした。[3)]」

この「ストップ価格」《стоп-цены》という新しい言葉を彼は引用符でつつみ，それに，「特定日付の価格」と注記している[4)]。おそらくこの当時使われた言葉であろう。ケーザーによれば，このストップ価格とは，「1950年前半の世界価格か，または，その時期の世界価格と1949年全体の世界価格との平均」である[5)]。しかし，この価格が

1) Frederic L. Pryor, *The Communist Foreign Trade System*, The M. I. T. Press, Cambridge, 1963, p. 132. なお，本書には邦訳がある(プライヤー著 小島康宏訳『共産圏の貿易体系』べりかん社 1964年12月)。この邦訳は，原著の注を殆んど全部省略しているので，以下では，原著の頁のみを引用する。

2) Frederic L. Pryor, *op. cit.*, p. 132.

3) И. Злобин, Мировой социалистический рынок, его цены, валюта и система расчета, 《Вопросы Экономики》, но. 2, 1962г., стр. 71.

4) Там же.

5) Michael Kaser, *Comecon. Integration Problems*

1953年まですえおかれ，そのあとでもあとで述べるように，若干の調整はおこなわれたが，その調整の基礎の価格としてはすえおかれたため，貿易価格と圏内の各国の現実の価格とが異常にかけはなれ，若干の国々はそれによって大きな不利をうけていると感じたといわれる[6]。このような不平は，合理的な基準なしに貿易価格が設定されていることの反映であると見ていい。

3) 1954—57年。1954年以後は何らかの基準価格をとり，これを調整 adjust[7] または修正 correct[3] して用いたといわれる。ここで修正というのは，ケーザーによれば，市場が不完全な場合とか，1956年のスエズ動乱のときのように，異常な価格運動が起った場合，その異常な一時的な影響を除去することを言っている[9]。では，その場合の基準価格は一定していたかというと，そうではなく，ある協定ではさきのストップ価格に若干の手直しを加えたり，別の場合には，「問題となっている商品の主要市場における前年の平均市場価格」を調整の基礎になる価格とした[10]。つまり，何を基準価格とし，それにいかなる調整ないし修正を加えるかが，必らずしも明らかでなかったといっても過言ではない。

4) 1958—61年。前の時期について示唆されうる混乱は，この時期にいたって一層甚しくなったようである。プライアーは，「この時期における公式の価格決定基準が何であるかを正確に規定することは困難である」と言っている[11]。ケーザーは，1958年以後1964年までは1957年価格が，場合によっては1958年価格が使われたといい[12]，ゲオルギエフも同様のことを言っている。彼は，「1958年から1962年までは1957年の平均世界価格が基準として用いられた」と述べている[13]。しかし，プライアーによると必らずしもそうではない。彼によれば，1958年6月のセフ第9回総会では，1957年の平均世界市場価格を基準にするように勧告しているが[14]，それと矛盾した種々の基準が各国の貿易関係者によって提案されているという。すなわち，東ドイツの政府当局者は，原料価格はもっと長期の世界価格を基準とすると言明し，また，1960年の貿易価格は1959年の世界市場価格を基準にすると言明したという。1957年にポーランドの貿易相は，ソ連との貿易協定でははじめて1957年の世界価格を基準とした，この価格は1年間固定されるが，世界市場価格に相当な変動が生じた場合には，一方の申し出によってこれを改訂しうる，という趣旨を言明している。プライアーの著書は，これ以外に様々な価格基準のあったことを報告し，ついで，「これらすべての事柄は，非公式な価格決定基準の方がおそらく比較的公式的な基準よりも重要であったかもしれないということを示唆している」と述べている[15]。

以上を通観して，つぎのことがわかる。第1に，最近まで，セフ加盟諸国の域内貿の易貿易価格について，何ら確率たるしかも合理的な基準は存在しなかったし，貿易価格については多くの混乱や不合理があったとみていい。価格の決定は，実際には，関係国の馳け引きや交渉力によって定められていたとみていい。それが，社会主義的な同志的協力の具体化であったということは，かなり困難でもある。おどろくべきことは，貿易交渉のさいの種々の馳け引きが，あとで，反国家的なスパイ行為として断罪されたことである。すなわち，1949年12月におこなわれたブルガリア共産党中央委員会書記であり政府の副首相であったコストフの裁判のなかで，コストフは，ブルガリアの煙草をソ連に高く売りつけるためにソ連へ実際量以下のオファーをしたり，貿易交渉にあたって，ブ

---

of the Planned Economies. Oxford Univ. Press, 1965, p. 141.

6) F. Pryor, *op. cit.*, p. 132.
7) F. Pryor, *ibid.*
8) M. Kaser, *op. cit*, p. 141.
9) M. Kaser, *ibid.*
10) F. Pryor, *op.cit.*, pp. 132～3.
11) F. Pryor, *op. cit.*, p. 133.
12) M. Kaser, *op. cit.*, p. 143.
13) Е. Георгиев, Экономика социалистической внешней торговли,《Внешняя торговля》, но.5, 1963г., стр. 59.
14) F. Pryor, *op. cit.*, p. 133.
15) F. Pryor, *op. cit.*, p. 134.

ルガリアの提供する煙草やパルプには高値をつけ，ソ連の商品には安値をつけたことや，ブルガリア国家の秘密を保護する法律を出し，ソ連代表には情報を与えず，ブルガリア外国貿易省の高官に資本主義国との貿易協定の基準価格をソ連の通商代表に洩らさぬように注意したことなどを，自己の犯罪事実として認めている[16]。この点は，1952年11月にプラーハでおこなわれたスランスキーの裁判でも同じで，チェコの貿易次官は，裁判のさいにつぎのように告白している。「外国貿易企業は，私の指令によって，ソ連にたいして世界市場価格をはるかに上廻る高値を要求した。外国貿易企業は，私の認可と指令にもとづき，クランクシャフトや発電機，モーター，油送管の輸出にたいして資本主義諸国からうけとる価格より30％高い価格を要求した。」もう1人の貿易次官は，このような寄生的な商売がチェコの機械貿易ではとくに著しく，コーヴォ公団の場合は電動モーターの対ソ輸出価格は資本主義諸国への輸出価格を400％上廻っていたことを告白したという[17]。これらの記録は，ソ連側でもそのようなことがなされていたことを容易に想像させるし，全体として合理的な価格決定基準の欠如を証拠だてるものである。

第2には，つい最近まで，「社会主義世界市場」の価格は，資本主義世界市場価格を基準として定められていたことである。もっとも，これに反する記述はある。1956年に出版した書物のなかでグンター・コールマイは，「ソ連の価格を出発基準とする傾向が近年ますます明らかになっている」と述べているが[18]，原著者の指示によって内容に若干の変更を加えたという1957年発行の邦訳書にはその1句が脱けおちている[19]。

第3には，それは同一商品にたいして圏内では統一的に適用される統一価格ではなかった。グンター・コールマイは1956年に，「社会主義世界市場のうえでの個々の通商協定において研究されている価格は，商品ごとになおまだ統一されていない」と述べている[20]。しかし，プライアーは，「ほとんどすべてのソ連の著者たちは口をそろえて同一商品にたいする圏内貿易価格はほぼ同一であったと述べている」と言い[21]，その例として，イー・ドゥディンスキー，エヌ・イヴァノフ，エフ・ブィストロフを挙げている[22]。合理的にはたしかにそうあるべきであろうが，上に述べたことからみて，同一商品同一価格の原則がそう簡単に実現されたとは考えられない。

このような混乱のなかで，1956年頃から，合理的な貿易価格基準についての論議が始まった。1956年に設定されたセフの外国貿易常任委員会は，この問題について研究を始めた[23]。その後1957年12月にプラーハのリブリスでチェコスロヴァキア科学アカデミア経済研究所主催の社会主義国際分業にかんする会議が開かれ，他の社会主義国からも経済学者が招かれた時に，この問題が始めて，きわめて広汎な形で国際的な討論にのぼせられた[24]。また，1957—58年頃東ドイツの雑誌『外国貿易』誌上でくりかえしこの問題が論じられた[25]。最近では，これが，社会主義世界体制の「固有の価格基盤」への漸次的移行の必然性という形で理解され[26]，そのために若干の論争がある。それらについては，稿を改めて論じたい。

2. いわゆる "Price discrimination"

セフの域内貿易について，ソ連が東欧諸国にた

16) F. Pryor, *op. cit.*, p. 136.

17) F. Pryor, *op. cip.*, pp. 136～7.

18) Gunther Kohllmey, *Der demokratische Weltmarkt. Entstehung, Merkmale und Bedeutung für den sozialistischen Aufbau.* Verlag Die Wirtschaft, Berlin, 1956, S. 267.

19) 松井清・吉信粛訳『社会主義世界市場』日本評論新社1957年3月，266頁参照。

20) G. Kohlmey, *a. a. O. S.* 266.(松井・吉信訳264ページ)。

21) F. Pryor, *op. cit.*, p. 134.

22) И. Дудинский, 《Вопросы экномики》, но. 6, 1963г.; Н. Иванов,《Внешняя торговля》, но. 10, 1962 г.; Ф. Быстров,《Вопросы экономики》, но.2, 1960г.

23) *Cf.*, M. Kaser, *op. cit.*, *p.* 142.

24) Vgl., Karl Morgenstern, "Zur Preisbildung auf dem sozialistischen Weltmarkt," *Wirtschaftswissenschaft*, Nr. 3, 1958.

25) 拙稿「社会主義的国際経済協力の問題点」『福井孝治教授還暦記会論文集　社会経済学の展開』日本評論社1960年6月参照。

26) 「社会主義国際分業の基本原則」『世界週報』1962年7月10日号55ページ。

いして price discrimination を実行し，これによってセフ加盟諸国を搾取しているという説がある。すなわち，1959年にホルスト・メンデルスハウゼンによって唱えられた説である。彼は，1959年5月と1960年5月，1962年11月と3回にわたって，*Review of Economics and Statistics* 誌上に一連の連作論文を書いて，その点を主張した[27]。以下に，メンデルスハウゼンの主張と，それを裏付けるデータを要約して示そう。

1) 彼はまず，1955, 56, 57, 58年のソ連の貿易統計をとり，それらのうち，ソ連と東欧諸国，ソ連と西欧諸国との輸出入単価を対比しうる商品をえらび出す。それら対比可能商品のカヴァレッジは第1表のとおりである。

2) これらの商品について，単位当り貿易価格を計算してみると，つぎのようになる。

3) ソ連と東欧諸国との輸出入価額を対西欧なみの単価で計算してみると，ソ連は東欧にたいする輸出においては，対西欧輸出よりも高い輸出価額を示し，東欧からの輸入においては，対西欧輸入よりも低い輸入価額を示している。それらを金額にして表示してみると第3表になる。

第1表　ソ連の対東欧・対西欧貿易品目中相互比較の可能な商品数とそのカヴァレッジ

A　ソ連の輸出商品

	1955年	1956年	1957年	1958年
商品数	47	48	48	49
その商品のカヴァレッジ				
ソ連から東欧へ	47%	47%	58%	64%
ソ連から西欧へ	57%	70%	67%	67%

B　ソ連の輸入商品

	1955年	1956年	1957年	1958年
商品数	20	25	22	17
その商品のカヴァレッジ				
ソ連が東欧から	9%	12%	9%	8%
ソ連が西欧から	15%	27%	24%	27%

資料: Horst Mendershausen, *op. cit.*, May 1960, p. 153, 161.

注: 1)　ここで「商品数」というのはソ連の対東欧，対西欧貿易におけるそれぞれの単位貿易価格の比較が可能な商品の数である。

2)　ここで「商品のカヴァレッジ」というのは，比較可能な商品についての輸出入額のソ連全輸出入額にたいする比率である。

第2表　ソ連の対東欧貿易価格と対西欧貿易価格との比較

A　ソ連の輸出商品

	1955年	1956年	1957年	1958年
ソ連から東欧諸国への輸出価格が西欧諸国への輸出価格にくらべて				
高いもの	29	32	32	41
低いもの	18	15	14	7
同じもの	—	1	2	1
合計	47	48	48	49

B　ソ連の輸入商品

	1955年	1956年	1957年	1958年
ソ連の東欧諸国からの輸入価格が西欧諸国からの輸入価格にくらべて				
低いもの	8	14	13	—
高いもの	10	8	6	—
同じもの	—	1	—	—
合計	18	23	19	—

資料: Horst Mendershausen, *op. cit.*, May 1960, p. 154 : May 1959. p. 115.

注: 注(27)で述べたようにソ連の輸入商品について検討した RAND *Memorandum RM-2507-I* を入手することができなかったので，1959年の論文から引用した。したがって，第1表のBの商品数と一致しない。

4) 以上を要約して，ソ連が対東欧貿易において，貿易価格の操作により，1955年6億400万ルーブル，1956年5億5510万ルーブル，1957年5億8600万ルーブル，1958年5億3700万ルーブルの利益を，4年間の合計で25億7800万ルーブルの利益をえている。これはすべて東欧諸国からの搾取であるとメンデルスハウゼンは言っている。

以上の分析のあとで，メンデルスハウゼンは，つぎのような結論を出している。「price discrimination が出てくる制度的なメカニズムはこの論文のなかでは検討されなかった。しかし，小共産主義国(東欧諸国を指す——引用者)の決定的な不利益はソ連との特殊な関係の下でそれらの諸国の取引の自由(bargaining freedom)が制限されていることに在ると信じていいだけの強力な理由がある。この特殊な関係がソ連を独占的＝買手独占的な地位においており，正にこの地位のなかでソ

27) Horst Mendershausen, "Terms of Trade between the Soviet Union and Smaller Communist Countries, 1955～57," *Review of Economics and Statistics*, May 1959; The "Terms of Soviet-Satellite Trade : A Broadened Analysis," *op. cit.*, May 1960; "Mutual Price Discrimination in Soviet Bloc Trade" *op. cit.*, Nov. 1962; *RAND Memorandum RM-2507-I*, The RAND Corporation, Santa Monica, California, Jan. 7, 1960. 最後の *RAND Memorandum* はこの論文を書くまでに手にすることができなかった。

第 3 表　ソ連の対西欧貿易と対東欧貿易との得失比較

A　ソ連の対東欧輸出の総括

(単位: 百万ルーブル)

年　度	(A) 対東欧輸出価額	(B) 同換算価額	A−B	$\frac{B}{A}$(%)
1955 年	3,390	2,863	527	84
1956 年	3,354	2,988	366	89
1957 年	5,881	5,445	436	93
1958 年	5,974	5,267	705	88

B　ソ連の対東欧輸入の総括

年　度	(A) 対東欧輸入価額	(B) 同換算価額	A−B	$\frac{B}{A}$(%)
1955 年(20 商品)	574	651	−77	113
1956 年(25 商品)	839	1,024	−185	122
1957 年(22 商品)	698	848	−150	121
1958 年(17 商品)	676	808	−132	120

C　輸出入合計

	1955年	1956年	1957年	1958年	合　計
輸出によってえた利益	527	366	436	705	
輸入によってえた利益	77	185	150	133	
合　計	604	551	586	837	2,578

資料: Horst Mendershausen, *op. cit.*, May 1960, p. 155, 161, 162.

連は，最有力な売手と買手とにはいってくる利潤を収納するのである。このような利潤の発生は意識的な計画を必要とするものではなく，ここで分析されたデータもこの種の計画が存在するとは言っていない。ソ連政府がここで観察したような価格差を作為的に作り出しているのでないことはこれを認めてもいいし，ソ連政府が価格差を作り出すにいたる経済的なメカニズムに気がついているかどうかが疑わしいくらいである。[28]

メンデルスハウゼンのこの説は，非常に大きな反響をよびおこした。この反響についてフランクリン・ホルツマンはつぎのように書いている。「メンデルスハウゼンの分析と結論とは，ソヴェト圏内の力関係や圏内の不和の考え得る原因についての経済的および政治的な implication のために，異常な興味を以て受けいれられた。彼の結論は広く引用され，今やソヴェト圏内の関係についてのわが国におけるかなりの定説であると見做されねばならない。」[29] ホルツマンは，メンデルスハウゼンの「搾取説」がニューヨーク州のロックフェラー知事が 1959 年 10 月 8 日ニューヨークにおいておこなった外交演説の中でも引用されたと述べた[30] あとで，つぎのように言っている。「いまや，ソ連がその経済的政治的な優勢を利用して，圏内貿易で他の圏内諸国から利益を得ているということは，一般に認められている。西側の観察者がソ連のブロックにたいする価格上の差別待遇ということを直ちに認めたということは，それが政治的レヴェルにおける圏内の関係についての一般の理解とまったく一致するように見えるだけに，容易に理解される[31]。」

にもかかわらず，ホルツマンはメンデルスハウゼンの引き出した結論に鋭どく反対して，そのような「ソ連による東欧の搾取説」は誤まりであると言う。ホルツマンの批判はつぎのとおりである。

第 1 に，セフ加盟諸国は，関税によるのではなくて，貿易の直接統制によって高度のアウタルキーを実現しようとする独特な「関税同盟」(customs union) である。したがって，第 1 に，圏内貿易価格は必ずしも外部の社会にたいする貿易価格と同じになる必要はないし，第 2 に，高価格で外へ売り低価格で外から買う機会を見のがすこともある。これは一種のアウタルキー効果 (autarky effect) であるという[32]。

この点を説明するために，ホルツマンは第 4 表のような仮説的なシェーマを設定する。

この場合ソ連からみて，A 型の商品を輸出して B 型の商品を輸入していれば，ソ連は常に世界価格より高い輸出価格と世界価格より低い輸入価格で東欧諸国との貿易をおこない，東欧諸国を搾取していることになる。しかし，ソ連が東欧諸国に

28) H. Mendershausen, *op. cit.*, May 1959, p. 118.

29) Franklyn D. Holzman, "Soviet Foreign Trade Pricing and The Question of Discrimination," *Review of Economics and Statistics*, May. 1962, p. 134. なお，Holzman はこの論文の他に，以下の各論文でもこの問題をとり扱っている。——"Soviet Bloc Mutual Discrimination : Comment," *op. cit.*, November 1962 ; "More on Soviet Trade Discrimination," *Soviet Studies*, July 1965.

30) *New York Times*, October 9, 1959, I. (Cited by F. D. Holzman, *op. cit.*, May 1962, p. 134.)

31) F. D. Holzman, *op. cit.*, pp. 134～5.

たいし，C型の商品の輸出とD型の商品輸入を行なうとすれば，上の場合とは逆に，ソ連は常に東欧諸国に搾取されていることになる。しかもこの何れの場合もコストの比較においては，比較生産費の要求は満足されている。そしてここからいえることは，ソ連が東欧諸国にたいして価格上の discrimination を行なう場合もあると同時に，東欧諸国がソ連にたいして同じ discrimination を行なう場合もありうるということである[33]。

第2に，ソ連は西欧にたいして交渉力 bargaining power が低く，西欧から常に discriminate されている。したがって，ソ連と西欧諸国との貿易で世界市場価格より高く買い，安く売る場合が多い。したがってメンデルスハウゼンが考えているように，ソ連と西欧との取引のさいの平均単位価格が即ち世界市場価格でもないし，したがってこの「世界市場価格」が価格差別を測定する妥当な標準でもないのである。これを別の言葉で言うと，ソ連と東欧との貿易が世界価格通りにおこなわれていたとしても，ソ連と西欧との差別された取引価格を標準にして考えると，ソ連の対東欧貿易を差別と誤認させる結果になる[34]。

第3に，同一名称の商品でも品質の違うものがあることである。たとえばブルガリアからソ連と西欧とへ売る煙草は，明らかに異質のものであるし，メンデルスハウゼンのあげている綿織物，毛織物，圧延鋼などは商品部類内の異質性の大きい商品であり，したがって，これによって東と西とに対する単位貿易価格を比較することは誤まりに導く場合が多い[35]。

第4に，商品価格は同時に2国間で決定される。従って，大量商品の輸出に高い値段がえられれば，少量商品の輸出には安い値段をつける場合もあるし，商品の輸入価格を高くする場合もある。したがって，他の取引と切りはなして1商品の輸出乃至輸入について単位価格を計算し，それを discrimination の証拠とするのは，誤まりに導くおそれがある[36]。

第5に，1国が任意の或る国から大量に買い入れてもらう場合にはその相手国にたいし自国の輸出価格を下げる可能性があり，そのことも，discrimination の計測を誤まらせるおそれがある[37]。

以上のような理由で，ホルツマンはメンデルスハウゼンのソ連による東欧の搾取にかんする説を拒否している。筆者は，ホルツマンによるメンデルスハウゼンの批判に原則的に賛成である。筆者は，セフの貿易価格が，明確で合理的な基準を欠くものであることは認めつつ，この貿易価格の操作を通じて，ソ連が東欧を搾取しているという理解については，これを根拠のないものと推断する。

第4表　ソ連＝東欧＝世界・貿易における仮定的な価格費用関係

商品別	世界市場価格	ソ連圏の関税同盟価格	ソ連のコスト	東欧諸国のコスト
A商品(ソ連→圏内諸国)	5	6	4	8
B商品(ソ連←圏内諸国)	7	6	8	4
C商品(ソ連→圏内諸国)	12	11	9	13
D商品(ソ連←圏内諸国)	10	11	13	9

資料: Franklyn D. Holzman, *op. cit.*, May 1962, p. 136.

32) *Ibid.*, p. 135. ソ連からメンデルスハウゼンの批判者として登場したアブラモフは同時にホルツマンの「関税同盟」customs union ; таможенный союз 仮説をするどく拒否している。См., Ф. Абрамов, Псевдонаучные исследования буржуазных экономистов, 《Внешняя торговля》, но. 10, 1963г., стр. 16.

33) F. D. Holzman, *op. cit.* pp. 145～6; *Soviet Studies*, July 1965, p. 45. ホルツマンは，1962年論文ではブルガリアの貿易統計について，1965年論文ではブルガリア及びポーランドの貿易統計について，東欧の小国のソ連にたいする逆の "price discrimination" を実証している。ソ連からメンデルスハウゼン及びホルツマン(！)の批判者として登場したアブラモフも同様の手続をとって，1957年のブルガリアの貿易統計からつぎのような事実を拾い上げている。

1957年のブルガリアとソ連の貿易協定の価格の平均世界市場価格からの背離(%)

ブルガリア→ソ連		ソ連→ブルガリア	
生果	+28%	銑鉄	−28%
罐詰野菜	+20%	ブリキ	−20%
ジャム	+60%	石油	−25%
コニャック	+30%	レール	−20%

彼は1958年にはブルガリアの対ソ輸入価格では世界市場価格より5%低く，対ソ輸出価格では15%高かったと述べている(Ф. Абрамов, там же, стр. 15)これはホルツマンの手法の模倣と考えられる。

34) F. D. Holzman, *op. cit.*, *Soviet Studies*, July 1965, pp. 44～45.

35) *Ibid.*, p. 47.

36) *Ibid.*, p. 62.

37) *Ibid.*